

楚遊日記(1)

●崇禎一〇(一六三七)年正月十一日〜三十日、二〇日間 徐霞客五十二歳

●訳注稿

第三部 南岳衡山から衡陽県城へ(一月二十九日〜三十日)

「一月二十九日」

《概要》南岳西側を南下。楊梅灘を経て、衡州府治の衡陽県城に着。静聞と緑竹庵で合流できた。

■本文の部

二十九日

早起、雨如注、乃躑躅泥途中。沿溪南行、逾一小嶺、是爲上梨坪。又逾一小嶺、五里、是爲下梨坪、復與溪遇。又循溪東南下、十里、爲楊梅灘、有石梁南北跨溪上、溪由梁下東去、路越梁東南行。五里入排衝、又行排中五里、南逾青山坳、排衝者、崗自譚碧嶺東南至青山、分爲兩支、俱西北轉、兩崗排闔、夾成長塢、繚繞爲田、路由之入、至青山而塢窮。乃逾坳而南、陂陀高下、滑濘幾不留足、而衣絮沾透、亦疲而不覺其寒。十里、下望日坳、爲黃沙灣、則蒸江自西南沿山而來、路遂隨江東南下、又五里爲草橋、即衡州府矣。覓靜聞、暮得之緑竹菴天母殿瑞光師處。亟投之、就火炙衣、而衡山古太坪僧融止已在焉。先是、予過古太坪、上古龍池、於山半間路靜室、而融止及其師兄應菴「雙磬」、苦留余。余急辭去、至是已先會靜聞、知余蹤跡。蓋融止扶應菴將南返桂林七星巖、故道出於此、而復與之遇、亦一縁也。

緑竹菴在衡北門外華嚴・松蘿諸菴之間。八菴連絡、俱幽靜明潔、唄誦之聲相聞、乃藩府焚修之地。蓋桂王以親藩樂善、故孜孜於禪教云。

■訳注の部

●訓訳

二十九日

早に起く。雨注ぐが如し。乃ち泥途中に躑躅す。

溪に沿ひて南行す。一小嶺を逾ゆ。是れ上梨坪たり。又た一小嶺を逾ゆ。五里にして、是れ下梨坪たり。復た溪と遇ふ。又た溪に循ひて東南に下る。十里にして、楊梅灘たり。石梁の南北に溪上に跨する有り。溪は梁の下よりして東に去り、路は梁を越えて東南に行く。五里にして排衝に入る。又た排中を行くこと五里にして、南のかた青山坳を逾ゆ。排衝とは、崗の譚碧嶺の東南より青山に至り、分れて兩支となり、俱に西北に轉じ、兩崗排闔して、長塢を夾成し、繚繞して田をなす。路之より入り、青山に至りて塢窮す。

乃ち坳を逾えて南す。陂陀高下し、滑濘にして幾んど足を留めず。而して衣絮沾透し、亦た疲にして其の寒きを覺えず。十里にして、望日坳に下る。黃沙灣たり。則ち蒸江の西

南よりして山に沿ひて来る。路遂に江に随ひて東南に下る。又た五里にして草橋たり。即ち衡州府なり。静聞を覓め、暮に之を緑竹菴天母殿瑞光師の處に得。亟すまやかに之に投じ、火に就きて衣を炙るに、衡山の古太坪の僧融止已に焉に在り。是れより先、予古太坪を過ぎ、古龍池に上る。山半において路を静室に問ふ。而して融止及び其の師兄應菴「雙瞽なり」、苦はなだ余を留む。余急にして辞去す。是に至りて已に先に静聞に會し、余が蹤跡を知る。蓋し融止は應菴を扶けて將に南のかた桂林の七星巖より返らんとす。故に道此に出で、而して復た之と遇ふ。亦た一縁なり。

緑竹菴は衡の北門の外の華嚴・松蘿諸菴の間に在り。八菴連絡し、俱に幽靜明潔にして、唄誦の聲相聞こゆ。乃ち藩府焚修の地なり。蓋し桂王親藩を以て善を樂しむ。故に禪教に孜孜したりと云ふ。

●語注

○上梨坪・下梨坪 「樟木市」図に栗坪が見える。あるいはここか。

○楊梅灘 「樟木市」図に楊梅橋が見える。

○排衝 「樟木市」図に、上牌冲・下牌冲が見える。

○望日坳 「衡陽城」図に望城坳が見える。

○黄沙灣 「衡陽城」図、大地図に見える。蒸江が東流して湘江に合流する直前、大きく北へ湾曲しており、湾曲部に囲まれた洲の部分が黄沙灣。

○草橋 青草橋ともいう。「衡陽城」図に見える。湘江に合流する直前の蒸江に架かる。黄埭は、対岸の漁船とあわせて「青草漁家」が衡陽八景のひとつだという。

○緑竹菴 不詳。「遊記」によれば、草橋から北へ二里あまりの郊外の地にあつたという。

○古太坪 徐霞客が古太坪を訪ねた記事は、現行の徐霞客遊記には見られない。

○桂林七星巖 鍾乳洞で、桂林市内きつての名勝。

○藩府 藩は王や諸侯の封国で、藩府はその御殿。

○桂王 この時の桂王は、神宗（万曆帝）の第七子、桂端王朱常瀛。万曆二九（一六〇一）年に封建され、天啓七（一六二七）年に藩府のある衡州府に拠る。崇禎一六（一六四三）年に張獻忠により衡州は陥落し、桂王は逃亡。同一七（一六四四）年に薨じている。（「明史」世表五、列伝卷一二〇本伝等）。

○孜孜 勤勉に勤めるさま。

○禪教 仏教の教え。

●口語訳

二十九日

《24》横口から南下し、衡陽県城へ

早朝に起きる。雨が注ぐように降っている。そこで泥濘の道を苦労しながら進む。

溪流に沿って南に行く。一小嶺を越える。ここが上梨坪である。さらにまた一小嶺を越える。五里進むと、下梨坪である。ここで道が再び溪流とであう。さらにまた溪流に循って東南に下る。十里で、楊梅灘である。

溪流の上に南北に跨がる石橋がある。溪流は梁の下から東に流れ去り、路は梁を越えて東南に伸びる。五里で排衝に入る。さらにまた排中を行くこと五里で、南の青山坳を越え

る。

排衝というのは、譚碧嶺の東南から青山まで崗が伸びており、そこで二筋に分かれ、両方とも西北に転じ、両側から崗が門を開いたように伸びて、長い塙を形成する。そして内側はぐるりを囲まれた耕作地をなす。路はここから入っているが、山塙は青山で極まる。そこで山塙を越えて南に進む。山道は上ったり下ったりしており、泥濘んで滑りやすく足を留めることができない。着物は汗でぐっしょりと濡れているが、疲労が激しいために、寒さを感じることがない。

十里で、望日坳に下る。(向かいが) 黄沙湾である。蒸江が西南から山沿いに流れてくるのが見える。路はその蒸江にそって東南に下る。さらにまた五里で(青)草橋である。こここそ衡州府である。

《25》衡陽県城

静聞を捜して、暮に緑竹菴天母殿瑞光師のところにいるのにたどり着いた。

速やかに緑竹菴に至り、火に就いて濡れた衣をあぶっていたところ、衡山の古太坪の僧である融止がここにいることが分かった。実は以前、私が古太坪を過ぎて、古龍池に上ったとき、山の中腹あたりにある静室で道を訪ねたことがあった。それが融止とその師兄の応菴「自注1」で、彼らはねんごろに私を引き留めてもてなそうとした。しかし私は急いでいたので誘いを断って辞去した。それがなんと既に私よりも先に静聞と出会っており、私の行跡を知っていたのであった。思うに、融止は応菴を助けて、南の桂林の七星巖を訪ね、その帰りであったようだ。そこで衡州府に立ち寄ることになり、私と再び出会うこととなったのだ。これもまた一縁である。

《26》緑竹菴

緑竹菴は衡州府城の北門の外にあつて、華巖・松蘿といった諸菴の間に位置している。八つの菴が連なっており、全てが幽静明潔であり、唄誦の声が聞こえる。こここそ藩王府が焼香をし、修行する場所である。

思うに桂王府は皇室関係の藩であることから善行を積むのを楽しんでいる。そこで仏教の教えを伝えるのに、熱心なのであろう。

「自注1」両目を失明していた。

「一月二十日」

■本文の部

三十日

遊城外河街、濘甚。暮、返宿天母殿。

■訳注の部

●訓訳

三十日

城外の河街に遊ぶ。濘甚し。暮に、天母殿に返り宿す。

●語注

○河街 城市の東側、湘江に面したあたりに広がる街区。二月一日条に「城中闡闡與城東河市並盛」とある「城東河市」がここにあたるだろう。譚民政は、現況を報告している（一三五頁）。

●口語訳

三十日

《27》衡陽遊覧

衡州城外の河街に遊びに行く。泥濘が甚だしい。暮に、天母殿に返り宿す。

（「楚遊日記（1）」以上）

訳注・薄井俊二、二〇二五年二月二十五日